

課題の6	春植えタマネギの無マルチ栽培における除草体系調査（継続）
------	------------------------------

転作田等でタマネギを大規模で栽培するには機械定植が必須となり、そのためには無マルチで栽培する必要がある。無マルチ栽培で課題となるのは、雑草対策である。

そこで、除草剤使用による除草体系の確立に向けて、除草剤の組み合わせによる比較試験を行い、今後の栽培普及の資料とする。

1 調査内容

- (1) 栽培環境 露地ほ場
- (2) 供試品種 マルソー（カネコ種苗）：早生
- (3) 調査方法 下表のとおり 4 種類の除草剤の組み合わせにより2つの調査区を設け、雑草の発生状況を調査

区名	回数	散布日	除草剤名
調査区 A	1 回目	4 月 17 日	ゴーゴーサン乳剤（ペンディメタリン 30%）
	2 回目	6 月 5 日	ボクサー（プロスルホカルブ 78.4%）
調査区 B	1 回目	4 月 17 日	モーティブ乳剤（ジメテナミド P19.7%、ペンディメタリン 23.1%）
	2 回目	6 月 5 日	ボクサー（プロスルホカルブ 78.4%）

(4) 耕種概要

- ①播 種 日：2 月 12 日 200 穴セルトレー
- ②定 植 日：4 月 17 日
- ③栽植様式：畝幅 190cm（床幅 90cm）株間 12cm 条間 24cm 4 条植え
栽植株数 17,544 本/10a
- ④施 肥 量

区分	肥料名（N-P-K%）	施肥量（成分量 kg/10a）		
		窒素 N	リン酸 P	加里 K
対照区	燐硝安加里 1 号 S552（15-15-12）	9.6	9.6	7.7
	有機アグレット 666（6-6-6）	2.4	2.4	2.4
	パワーリン（0-30-0）	0.0	2.4	0.0
	計	12.0	14.4	10.1

- ⑤収 穫 日：8 月 3 日

2 雑草の発生状況

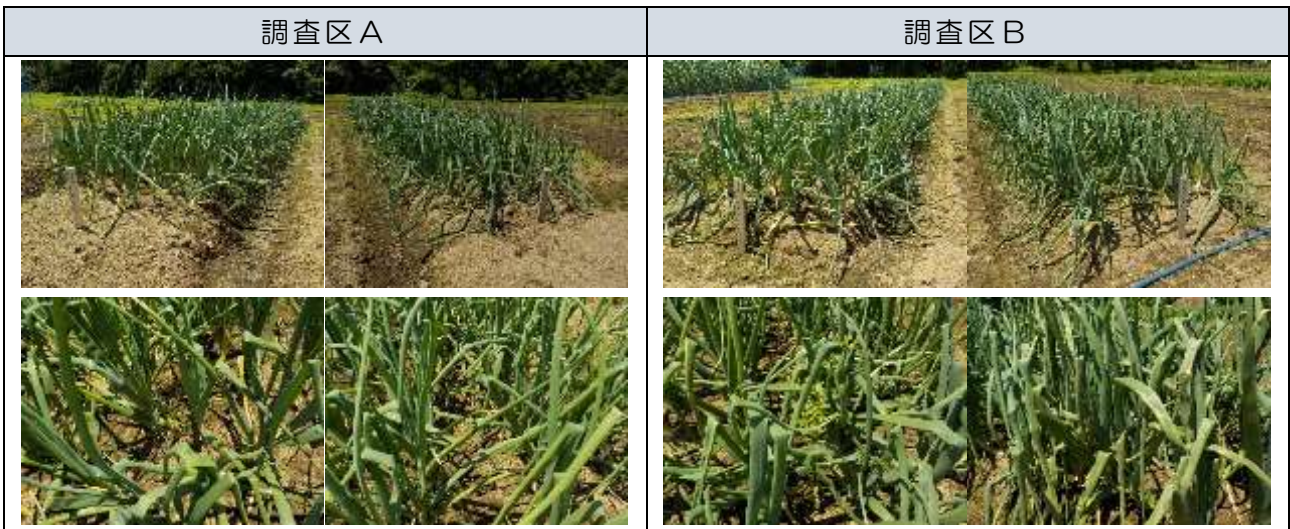
①定植 29日目 (5月15日)



②定植 57日目 (6月12日)



③定植 85日目 (7月10日)



④収穫後 (8月3日)



2 調査結果

1 回目の除草剤散布以降、約 2 週間おきに調査した雑草の発生状況は表 1 のとおりである。B 区では、定植後から収穫前までの全期間に渡って A 区よりも雑草の発生が抑制されたが、両区とも 2 回目の除草剤散布前が雑草の発生箇所数のピークとなっている。

しかし、雑草の発生量が最も多かった定植後 46 日目の A 区であっても、畝 1m 当たりの雑草の発生確認箇所数が 4 箇所弱であり、タマネギの生育には影響がないことから、除草剤の効果は高いと考える。

表 1 畝 1m 当たりの雑草の発生確認箇所数

定植後日数 区名：雑草の種類	15 日目 [5/1]	29 日目 [5/15]	46 日目 [6/1]	57 日目 [6/12]	71 日目 [6/26]	85 日目 [7/10]
A 区：広葉	1.37	1.25	2.12	1.13	0.87	0.50
A 区：イネ科	0.75	1.62	1.62	1.62	1.87	1.13
A 区合計	2.12	2.87	3.74	2.75	2.74	1.63
B 区：広葉	0.25	0.50	0.37	0.62	0.62	0.62
B 区：イネ科	0.37	0.37	0.00	0.12	0.25	0.00
B 区合計	0.62	0.87	0.37	0.74	0.87	0.62

4 まとめ

今年度は、昨年度と比較すると除草剤の効果がよく現れ、特に B 区の方では定植後 45 日間程度はほぼ雑草の発生がなかったと言っても良いほどの効果であった。

A 区よりも B 区の方が雑草の発生箇所数が少なかった理由としては、A 区に使用したゴーゴーサン乳剤に含まれる除草成分が 1 成分であるのに対し、B 区に使用したモーティブ乳剤には除草成分が 2 成分入っていることから、B 区の方が雑草の発生がより抑制されたためであると思われる。

次年度においても同様の結果となるかどうか、引き続き調査を行う。